九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

特権的肉体論Ⅰ：股裂きの主体を生きる李礼仙・「二都物語」を跨ぎつつ

林，相珉
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年

https://doi.org/10.15017/8500

出版情報：九大日文. 7, pp.98-119, 2006-04-30. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

特権的肉体論Ⅰ

――股裂きの主体を生きる李礼仙・「二都物語」を跨ぎつつ――

林 相珉（Lim Sang-min）

Ⅰ

一九七四年十二月十三日朝、大阪市東成区の市立大成小学校の講堂では「全校児童と教職員計六三〇名が参集する前」で次のような「宣誓式」が行なわれている。

ぼくは李（リ）という朝鮮人です。これからは朝鮮人であることに自信をもち、一人ひとりと話しあい、差別と闘い、朝鮮人が日本人にとられてきた歴史や、言葉をとりもどしていきたいと思っています。そこでみんなの前でいいたいのです。これからは、朝鮮人も日本人も遊んでいる時であろうと、どんな時でも気軽に李（リ）と呼んでほしい。（金一勉『朝鮮人がなぜ「日本名」を名のるのか』一九七八・五、三一書房、二三七頁）

右は小学校「六年生の一少年が胸を張って」、自分の本当の名前を名のった「世にも不思議な」「本名宣言」である。金一勉によれば、いわゆる「本名を名のる運動」は一九六八年兵庫県立尼崎工高で、朝鮮人と部落出身の生徒らが学園闘争を展開して「部落民宣言」と「朝鮮人宣言」をした前例がある。しかし一九七一年大阪市立中学校長会が「朝鮮人迷惑論」を趣旨とする『外国人子弟の実体と問題点』と題する文書を公にしたのが決定的な導火線となり、翌一九七二年に「教育労働者としての朝鮮民族問題を捉え直す作業」を目的とし「大阪市外国教育研究協議会」が設立されることになる。さらに一九七四年、大阪市教育委員会は朝鮮人の子供の名前を朝鮮語の「母国語読み」するため『人名仮名表記便覧』を作りあげ、各校に配布した。そしてこのようなグループが日本全国に拡大、その延長線上に右の「本名宣言」がある。姜尚中も『在日』（二〇〇四・三、講談社）のなかで、早稲田大学在学中の一九七四年に韓国文化研究会に所属し「「在日」同胞の家を一軒一軒訪問し、韓国名を名のるように呼びかけ」る「オルグ」をしたと書いている。

しかしここで注目したいのは運動史ではなく、運動それ自体が持っているベクトルと「本名を名のる運動」を使って何かを語ろうとする金一勉の姿勢である。「朝鮮人であることを隠してあげるのが友情」だとする立場を「変態同情」として斥ける金一勉の姿勢は、同書の中で「朝鮮出身であることを異常なまでに隠したり否定し」たとし、都はるみと岡田可愛を取り上げ、「自己民族の劣等を自作自演」した「立派なもの」として皮肉り軽蔑している。そして「その見地から」、李礼仙を「日本名

ではなく堂々と朝鮮名を名のった」「例外中の例外」として持ち上げている。さらに「ある韓国人に〝おまえも朝鮮人なら朝鮮人らしく生きろ〟と言われ、李礼仙の芸名を使い始めたんです」（『朝鮮人がなぜ「日本名」を名のるのか』、一四九頁、ただし初出が書いてないので原文の記事は未確認）という記事を引用し、「〝擬似日本人〟を志向することなく、朝鮮民族の血と文化を踏まえて生きている」「優れた女性」として紹介している。

しかし一九六三年から唐十郎が率いる「状況劇場」に星山初子という通名で参加した李礼仙は、「何回かの公演のあと、一人前に自分も芸名をつかいたくなっ」たとし、次のように語っている。

> そのとき、高校時代の友人の「カッコいい」という言葉を思い出し、日本姓よりも李にしようと決めた。けれども、初子ではいかんせん色気がない。いろいろ考えたが思いつかないので、いっそのこと韓国風の名前にしようと……。母の名前が吉仙なので、吉はつかえなくても仙はつかえると思った。上の字は初に似ている礼にすることにした。李礼仙―字の感じも音も悪くないと、一ヶ月近く考えて決めた。まわりの反応も悪くなかった。その後、社会生活は李礼仙で通すことになった。（李麗仙『五つの名前』一九九九・三、集英社、十九頁）

李礼仙という名前の由来は、金一勉が引用した記事と右の文章からは明らかに違いが見られる。しかしこの違いを李礼仙本人による錯綜・語り直しとして捉えるにしても、金一勉の文脈にはある強引さがある。金一勉が引用した記事がその当時の李礼仙の心象を代弁しているものであったとしても、注意すべきは「朝鮮人なら朝鮮人らしく生きろ」と言われて使い始めたのは、「本名」ではなく、まさに「芸名」だったことである。さらに、それは朝鮮語の「母国語読み」でもなく日本語読み（リレイセン）である。なのに金一勉は李礼仙が「朝鮮名」を名のっているだけで、短絡的に「朝鮮民族の血と文化」へと繋げてしまう。ちなみに、俳優であり作家でもある息子の大鶴義丹は「想像」は出来ても、「あえて自らの芸名を本来の韓国名「李」とする行為の本当の意味を理解するのは難しい」（『昭和ギタン』二〇〇五・十二、バジリコ、二十頁）と書いている。

ここで冒頭の「本名宣言」が行なわれた一九七四年の十月号の「別冊新評」に注目してみよう。この号は一冊丸ごと唐十郎の特集号になっているが、その中には「編集部」による「李礼仙インタビュー」が掲載されている。その中で「韓国人であるということで口惜しいとか、差別された経験については」という「編集部」の質問に対して、李礼仙は「すごい衝撃的な意味ではあまりないですね。何らかの形であったことはあったけども、大体自分でそういうことをわかってたから、別に口惜しいとは思わないし、ふだん友だちの関係ではほとんどないといってもいいくらいですね」と答えている。さらに韓国語が「ぜんぜんしゃべれない」とする李礼仙に対して「編集部」は、それ

なら「自分自身を何者だと思いますか」と問いかける。その質問に対して李礼仙は次のように答えている。

一度、ずット前に韓国と日本の私生児だなんていわれたことがあるけれども、まあずいぶんかっこういいことばを使ってくれたななんて思ったことがある。わたし、日本でもわりと昔からアクのつよいほうで、街を歩いてても違和感があって、ふり向かれたりして、じゃ韓国にいったら同じ朝鮮人だから違和感がないかと思うと、やっぱり違和感があったりして、同じ違和感があるなら、生まれ育った日本がいいわなんて思ったりしてるけれども。でもいいじゃないかな、そういう人間がいても。（八十一頁）

金一勉は李礼仙を「朝鮮民族の血と文化を踏まえて生きている」と持ち上げているが、しかし本人は「韓国」だけではなく「日本」からもある「違和感」を抱いている。そして片っ方の「違和感」を突き放して、どちらかに偏るのではなく、両方の「違和感」に股をかけて生きる、まさに股裂きの主体を生きる「そういう人間」である。「そういう人間」としての李礼仙を「朝鮮名」という刀で切ろうとする金一勉の行為に、ある強引さと無謀さを指摘せざるを得ない。本稿の狙いは右のような強引さと無謀さ故に、さらに見えにくくなる存在に光を当て、その全貌を掘り起こし、それが孕む問題を表面化することにある。

Ⅱ

股裂きの主体を生きる李礼仙をもう少し立体的に捉えるために、一つの論争に注目してみる。

それは在日を生きる、李恢成と金石範との間で起こった論争である。まず李恢成が「韓国国籍取得の記」（「新潮」一九九八・七）を発表し、金石範が「いま、「在日」にとって「国籍」とは何か―李恢成君への手紙」（「世界」一九九八・十）で反論した。それに答える形で李恢成は「「無国籍者」の往く道―金石範氏への返答」（「世界」一九九九・一）を発表し、さらに金石範は「再び、「在日」にとっての「国籍」について―準統一国籍の規定を」（「世界」一九九九・五）と続けている。

論争のキッカケとなるのは李恢成の次のような文章である。

五回目のソウル行が迫ってきている。翰林大学と東亜日報が五月二十九日と三十日の二日間に亘って共催するシンポジウムに私は招かれていた。シンポジウムのテーマは『東アジアの市場経済と伝統―新しい世紀に向けて―』というものである。現在のアジアの状況を考えれば、まさに時宜にかなうものだといえよう。このシンポジウムでは、政治・経済・文化が三つながらに論じられるかもしれない。そうなれば、私は一役買えるだろう。三十日の閉会前に私が講演することになっていた。タイトルは『二十一世紀に向う韓国と日本の文学』となっていた。これは明らかに私の力

量をこえた大きなテーマである。だから私の話は竜頭蛇尾になりかねないと怖れている。もっとも、そのテーマについて書くのが本稿の目的ではない。この講演の中で、私は自分の国籍を変更するのを明確にしようと考えている。「朝鮮」籍から「韓国」国籍に変える。（本誌が店頭に並ぶ日には既に私のソウルでの講演は済んでいることになるが）

（「韓国国籍取得の記」、二九四―二九五頁）

李恢成によると「組織内部の分裂に厭気が差したのとある人物を守ろう」として、「一九六七年一月一日に朝鮮総連系の新聞社を辞め」た後、「本名を隠して日本の小さな会社に入って働」くことになる。その後小説を書き、一九六九年六月に「またふたたびの道」で第十二回群像新人文学賞に受賞する。そして「当時、「朝鮮」籍の人間が反共国家の韓国に入るのは、ラクダが針の穴をくぐるほどむずかしい時代」に、「第一回目の韓国行」（一九七〇年十月）が実現したと語っている。それから『『砧をうつ女』が芥川賞となってほどなく韓国日報社から招待」されたことによって二回目の訪韓（一九七二年六月）が、そして一九九五年十一月に「翰林科学院日本学研究所開所記念シンポジウム」の招請によって三回目の訪韓が実現する。その後一九九六年十月にソウルで開催された「韓民族文学人大会」に参加出来た四回目の訪韓までを説明した後、「この稿」を次のようにまとめている。

状況が変わったのに自分は「亡命者」だとか「無国籍者」とかいって日本で安穏と暮らしている（中略）私は今は「無国籍者」とか「亡命者」という立場から離れ、「韓国」国籍を取得しようとしている。ソウルで私はその決心をのべようとするだろう。しかし何よりも、文学者として、この時代のすべてを見届けたいと思っているその希望を語るだろう。時代と新たな状況の変化が私にこの決心をもたらしたのだった。（三一七頁）

李恢成の「韓国国籍取得の記」を読んだ金石範は、執筆理由を二つ挙げながら、反論する。

「韓国国籍取得の記」を読んでこの手紙の形に托した一文を書くことにしたが、その理由は二つある。一つは李君の国籍変更についての拙文に対する曲筆その他。二は「在日」のわれわれにとっての生来的でない〝祖国〟国籍とは何かについて、改めて考えざるを得なかったということである。

（「いま、「在日」にとって「国籍」とは何か―李恢成君への手紙」、一三一頁）

金石範は「無国籍者」を、「AからBへの選択を自分の内に持とうとしない在日朝鮮人」だと規定している。それから「南・北の国籍から外れて無国籍の少数者が生まれ」てくる経緯を説明し、「無国籍はあり得る一種の解体を予感しながらも、敢え

て不利な方向への選択をする」者だと語っている。しかし「李恢成君への手紙」の中で金石範が最も多くの紙面を割いて語っているのは、李恢成が金石範に対して「「亡命者」だとか「無国籍者」とかいって日本で安穏と暮らしている」と書いた部分である。すなわち金石範は「安穏と」という言葉に挑発され、李恢成の「AからBへの選択」がどれほど「自己合理化」の「弁解」であり、「飾りが多い」「すぎた弁明」であるかを批判しているのである。具体的に金石範は李恢成が「韓民族文学人大会」に参加するために、「臨時入国パスポート」のことで在日韓国領事館に行き、「参事官と領事」が国籍変更を迫る場面を引用する。李恢成が「次回から韓国へ行くときには〈韓国〉国籍に変える」と言った時、「あらかじめそういうケースを想定したし、その状況の中で自分の判断に従っただけ」だと書いたのは嘘で、それはあくまでも「国籍変更の約束の履行をきびしく迫る参事官との遣り取りの結果」であったと、その「明言」ぶりを「すぎた弁明」だと批判している。

金石範が取り上げた在日韓国領事館での出来事について李恢成は、それは金石範の「捏造」であると反論する。そして「「無国籍者」は条件がゆるす限り、積極的に「国籍」をとった方がよい」し、「朝日国交が開始すれば、「少数者」が袋小路に入り、「難民」として辛うじて生きていくという金氏の妄想」は、「消極的すぎる」故、自分は「ついていけない」と語る。さらに「自分の生き方と意見を異にするからと同じ文学者相手にたいして、これほど徹底的に容赦なく自論をふりかざした」金石範の文章は、「「手紙」の形式を借りた「論争」ではなく、特定人物にたいする完璧なバッシングそのもの」であり、「中傷誹謗」だとし、「私たちのこの往還書簡に欠けているのは愛ではないだろうか」と話を締めくくっている。

これに対して金石範は「再び、「在日」にとっての「国籍」について—準統一国籍の規定を」の中で、「李恢成と私との遣り取りに対して『世界』編集部宛に、とくに在日朝鮮人読者から失望や悲しみ、顰蹙（ひんしゅく）の声が寄せられたのを知って、私自分も悲しく、胸を刺される思いをした。また電話その他での友人や知人たちの、「在日」同士でカッコウ悪いから相手にしないでおけとか、そのままでは罵言雑言の内容が事実として罷り通りかねぬので放置してはいけないなどの声」があったことを前置きして、李恢成の「返答」は「支離滅裂」で、「「国籍」の問題について何ら実質的な答えをなすものでなかった」ため、「「訪韓の年次」以外は李恢成の「返答」の一切を認めないことを明記」し、「論争」を打ち切った。

この二人の「往復書簡」・論争で問題にしたいのは、二人の「在日」のあり方を物差しで計り、その可能性の是非を探ることではない。注目したいのは、二人の論争によって、一番辺鄙なところに突き放されるのは何かである。まず、金石範は「再び、「在日」にとっての「国籍」について—準統一国籍の規定を」の中で、評論家四方田犬彦と「月はどっちに出ている」の映画プロデューサー「シネカノン」社長李鳳宇の対談（『先に抜け、撃つのは俺だ』一九九八、四、アスキー）を紹介している。

四方田（犬彦）　朝鮮籍から最近変えたじゃない、韓国籍に。あれはなんなの？

李（鳳宇）　不便だからね。イタリアにも行けないし。フランスに行くっていうと四ヶ月かかるんですよ。ヴィザの発給までに。

四方田　そりゃ面倒くさいよな。

李　そういうのはすごく影響するんで。

四方田　プラクティカルな理由なわけね。イデオロギーじゃなくて。

李　国籍ってのは、ただの記号ですからね。われわれにとっては。（二一一頁）

右の対談を紹介した後、金石範は「ちょっとした苦渋をたたえながらも衒いのない爽やかな韓国籍変更の弁である」と書いている。「ＡからＢへの選択を自分の内に持とうとしない在日朝鮮人」としての金石範が言う「爽やか」さとは、言うまでもなく、李恢成の「自己合理化」の「弁解」と「飾りが多い」「すぎた弁明」を想定しての発言である。注目したいのは、「爽やか」さと「すぎた弁明」の境界線・線引きである。金石範は、李鳳宇の生き方に同調しているわけではなく、あくまでも「飾りが多い」「すぎた弁明」をしないが故に、「爽やか」さという言葉を使っている。しかしながら李鳳宇が国籍変更を「自己合理化」し、「飾りが多い」「すぎた弁明」を並べたら、果たして「爽やか」さという言葉は、どう変容するだろうか。金石範は「李恢成君への手紙」の中で、「断食をするとき悲しい面持ちをするな。これはキリストが弟子たちに向かっていった私の好きなことば」だとし、李恢成は「断食をしないうちから悲しき面持ちをする傾きが大きい」と指摘しているが、要するに金石範の「爽やか」さの裏には、「悲しい面持ち」を一切許さない、「キリスト」＝「ＡからＢへの選択を自分の内に持とうとしない在日朝鮮人」のマナザシがあるのではないだろうか。

今度は、金石範とは対立的な立場に立っているように見える李恢成の文章に注目してみよう。

私の心にもこの「帰化」という気持がかすかによぎったことがあった。「北」にせよ「南」にせよ、愛想尽かしばかりしているからである。しかし私がそのとき思い出したのは、田道間守であった。（中略）田道間守は、その昔、朝鮮から日本に渡来してきた人の子孫なのだった。戦争中の私はこの神話にたわいなく胸をときめかせた。自分もいつか田道間守のように天皇に忠孝を尽くそうと固く固く決心した。あの時代を思い起こせば、ひやりとする。なんと罪深い神話づくりなのだろうか。「日本書記」には世界帝国の中国を意識した小帝国的傾向があるといわれるが、少年の私はまさに小さな田道間守だった。まるでおかされたような後味の悪さが消えない。それなのにまたふたたび「帰化」するということなど、どうしてあり得ようか。（韓国国籍取

得の記」、三一六―三一七頁）

いずれにせよ、南北の国家と離れた「第三勢力」となれば「在日」は結局のところ孤立し、日本人としての帰化予備軍を増長させるに留まるだろう。金石範氏、ここまで書いてきた私は自分の考え方とあなたのそれとが、意見の相違こそあれ、民族を愛し「在日」を憂慮する点でまったく同じなのだということを発見した。（「「無国籍者」の往く道―金石範氏への返答」、二六九頁）

右の文章のなかで李恢成も書いているように、金石範と李恢成は「意見の相違こそあれ」、「まったく同じ」立場に立っているのである。もちろん、ここで指摘したいのは「民族を愛し「在日」を憂慮する点」が「まったく同じ」であることではなく、まさに、「民族を愛し「在日」を憂慮する」立場や「在日」という言葉を聖化するために、「帰化予備軍」および「帰化人」を最も遠い辺鄙に突き放してしまっていることが同じだということである。そしてこの二人の論争が激しくなればなるほど見えにくくなるのは、まさに股裂きの主体を生きる人達の生である。このような生に光を当てない限り、見えない、解読出来ない光景がある。その一つが「二都物語」である。

Ⅲ

「二都物語」は、一九七二年三月十四日の夜、戒厳令下ソウルの西江（ソガン）大学構内の野外舞台で、韓国語で一晩だけ無許可上演され、その後「文芸」（一九七二・六）に発表、戯曲集『二都物語・鐵假面』（一九七三・十二、新潮社）に収録された。「二都物語」の上演は、詩人金芝河（キムジハ）の協力下で、ソウルの劇団「常設舞台」との合同公演で「日韓反骨親善大会」と称し、「常設舞台」側は金芝河作「金冠のイエス」を上演した。状況劇場初の海外公演である。唐十郎は状況劇場の赤テントを率いて「玄海灘を越えてしまった」ことについて、「海峡報告」（「映画評論」一九七二・六）のなかで以下のように書いている。

胎児は母の胎内でその母の夢見た悪夢を見て怯えている。われわれは何時のときであったか、列島の何処からか離れ母親の乳首からも離れてその時の不安から開放されたように日本列島の悪夢の文化のなかを彷徨った。（中略）しかし、われわれが動く軌跡は何時か母の悪夢が通り過ぎた血なまぐさい磁場をステップしていつか日本列島と韓半島の間をさえぎる玄界灘を越えてしまった。これはまことに必然ではないか。時間を逆流すればもっとも罪深い空間が立ち現れる都市の文化は観念的上昇をねがうに比してわれわれの肉体は下降を願う。それ自体ファウスト的時間の冒険であるともいえよう。東京からソウルへ、

ソウルから東京へその行跡を幾度もくり返すうちにわれわれが立っている地盤は時間の沼の中に沈み、そのときわれわれの母が何者であったか、そして今われわれは何者であるかを知ることができよう。それを知ることができるということは死に果てた観念だけがさかえる日本列島において実にタブーであったのだ。（十五―十六頁）

「何時か」「母の夢みた」「血なまぐさい」「悪夢」を、「時間を逆流」させることでその「罪深い空間」を観客に現前化し、「母は何者であったか、そして今われわれは何者であるか」を「ズタズタ切り裂かれる」思いと共に思い知らせること、それが唐十郎の創作及び演出方法である。そしてその「悪夢」（「劇血（げきち）」は「役者が縁側に舞い立った時に流れ出す」（「灰かぐらの由来」『腰巻お仙』所収一九六九・七、新潮社、五十二頁）ものだと語っている。「縁側」、すなわち舞台に立って、役者は「見られる」というその「空間に狙いをつける」存在、ということである。これがいわゆる六十年代後半に小劇場演劇運動が盛んだった時期、唐十郎が自分の演劇を理論化した「特権的肉体論」である。佐藤忠男は「情感と肉体」（「新劇」一九六八・九）のなかで、当時の演劇界について以下のように述べている。

俳優の肉体からジカに伝わってくる昂奮というものが、演劇のもっとも基本的な魅力のひとつであるということは疑うわけはゆかない。現代では、その種の昂奮は大部分はスポーツによって充たされることになっている。そして、おそらくは、野球とか、サッカーか、ボクシング、競馬、といった、スポーツの見世物化が大規模に成り立つようになっていった時期から、演劇における肉体的昂奮という要素は失われていったのである。見世物に肉体的昂奮を主として求める者たちはスポーツ見物へ、見世物が知的な喜びであることを求める者だけが演劇へ、という分解作用が起こったわけだ。形や色彩に対する知的な興味だけが絵画に、という役割の分化が行われていった過程と規を一にするのではあるまいか。（一一二頁）

佐藤忠男は演劇を見ることによって巻き起こされる「肉体的昂奮」の不在を指摘している。そしてそこに蔓延しているのは、ただの「言葉、言葉、言葉で終始する」「知的な喜び」だけだとする。このような「役割の分化」による「言葉」の蔓延と「肉体」の不在に勝負をつけたのが「特権的肉体論」であるが、唐十郎は「知的な喜び」だけを生産しつづける劇作家を「三〇日間の月経に似て為す術」もないものとし、次のように批判している。

もはや偉大な戯曲が必要なのではない。戯曲の中にある作家の劇的な精神が役者を動かすのではない。劇的な役者の精神が戯曲を呼び起こすのだと僕がいえば、そこらにいる劇作家然とした奴らは嫌な顔をするにちがいない。

（「役者の抬頭」『腰巻お仙』一九六九・七、新潮社、三十八頁）

唐十郎は「新劇役者が戯曲を選んだところで、創造の冒険が終わる」と断言している。これを言い換えれば、戯曲が先にあって、役者はそれを演じるだけであるならば、そこから巻き起こされるのは「知的な喜び」のみということであろう。しかし唐十郎の書く芝居は「一緒に三度の飯を食うのも嫌になるほど、一クセも二クセもある」「一人一人、情念の特徴をもっている」役者のためだけのものだと語っている。それから「紅の優しき母胎の形」をした紅テントを張り、現実原則に浸っている市民をかどわかし、悪夢を見せるわけであるが、一度だけ、そのかどわかしの「遊戯のタガがすっ飛んだ」時がある。

その名「状況劇場　上演強行に警官出動　夜の新宿、テント騒動の一幕」（「朝日新聞」一九六九・一・四）である。逮捕まで至った「騒動の一幕」の原因は、「無許可で新宿西口の都立公園にテント劇場を設置」した故である。しかし注目したいのはその後のことである。逮捕以後について唐十郎は「私的兵法」（『日本列島南下運動の黙示録』所収、一九七二・十二、現代新潮社）で詳しく説明している。機動隊による逮捕まで「すべて事前に予測」してた唐十郎は、舞台衣装である自衛隊の服をひっかけ、留置場でも芝居（遊戯）を続ける。しかし「一つだけ予測し得ないことが起こった」とし、次のように語る。

それは、李礼仙の逮捕であった。朝鮮人、李の登録の期限が切れており、強制送還も、相手側の自由裁量によって決定されるという事態であった。この瞬間、遊戯のタガがすっ飛んだ。私は同居の人びととひとつも変わらぬ囚人となった。（二六一頁）

かどわかし（劇による襲撃）に来た者が忽ちかどわかされる（強制送還）瞬間、唐十郎は、留置場の李礼仙の「貌」から、どんな「情念」（悪夢）を読みとったのか。その李礼仙の「情念」を描いたのが「二都物語」である。しかし、「遊戯のタガがすっ飛んだ」事件から「二都物語」が書かれるまでは三年を待たなければならない。「海峡報告」中で唐十郎は、一九七二年三月に「玄界灘を越えてしまった」ことは「必然ではないか」と書いているが、果してそれは唐十郎だけの「必然」だったのか。

一九七二年三月に出版された『金史良作品集』（理論社）の表紙には、「〝朝鮮〟の時代が来た……という。政治も文学も芸術も、ようやく、朝鮮をみつめようとしている」という言葉が象徴的であるように、一九六五年の「日韓国交正常化」を前後に朝鮮及びアジアへの関心が高まり始め、一九七〇年前後は多くの雑誌が「朝鮮」を売り物（特集及び特集に準ずる企画）にし始めた時代である。

時系列的に「朝鮮」特集を並べてみると、「日韓問題の総括と展望」（「現代の眼」一九六六・一）、「近代朝鮮と日本」（「思想」一九六九・三）、「われわれにとっての朝鮮」（「思想の科学」一九六九・六）、「創造的課題としての朝鮮」（「新日本文学」一九七〇・九）、「朝

鮮文学」（「文学」一九七〇・十一）、「アジア文化の今日的視点」（「新日本文学」一九七〇・十一）、「金大中〈憤りをもって韓国の現状を訴える〉」（T・K生の「韓国からの通信」の第一信掲載、「世界」一九七三・一）、「韓国の現状と日本人の朝鮮観」（「世界」一九七三・九）、「金大中氏事件 - 何が問われているか」（「世界」一九七三・十）、「いま〈植民地〉を考える」（「新日本文学」一九七三・十一）、「〈朝鮮〉の現実と〈在日〉朝鮮人の表現」（「新日本文学」一九七四・三）などがある。

さらに、以上のような朝鮮ブームと相まって、在日文学が登場してくるのが、まさに、一九七〇年前後である。金鶴泳が「凍える口」（「文芸」一九六六・九）で文芸賞に入選、金石範は「観徳亭」（「文化評論」一九六二・五）で日本語創作を断って以来、七年ぶりに登場してくるのが、一九六九年（「虚夢譚」、「世界」八）である。そして、李恢成は、「またふたたびの道」（「群像」六）で、一二回群像新人文学賞を受賞したのが一九六九年、さらに、「砧をうつ女」で第六十六回芥川賞を受賞したのが、一九七二年である。

唐十郎は、演劇を「やる者とみる者という関係の上で幕が開くのですから、何を見せるべきかという有効性の手品が必要となります」（「夢判断の手品」『腰巻お仙』一九六九・七、新潮社、四五頁）と語っている。右の「有効性」という言葉は、「海峡報告」における「必然」という言葉と符合するものと考えていい。すなわち、唐十郎が率いる紅テントが「玄界灘を越えてしまった」「必然」とは、すでに同時代のステージに容易されていたのではなかろうか。それでは問題は、その「有効性」という時代の波に乗って見せる「手品」（悪夢・劇血・情念）とはどのようなものなのかである。唐十郎は刑務所の李礼仙の「貌」と、「朝鮮」をめぐる同時代の言説に対し、どういう「情念」（悪夢）を用意して観客をかどわかそうとしたのか。

「二都物語」はタイトルからも分かるように、朝鮮海峡を渡る、跨ぐことが大きなモチーフとなっている。そしてその朝鮮海峡を渡ってきた人達がいる。一方は、「昼間は職安、夜は万年筆屋の二「貌」股をかけ」ている「プサンから密航して、戸籍を探し歩く元日本人」、すなわち「幽霊民族」である。そしてもう一方は、「お母さんのお腹の中」にいるとき、朝鮮海峡を渡って来た「不滅のジャスミン」のリーランである。リーランはいつも痰壺を抱えている。そして次のようにせがむ、「百円頂だい」。このリーランは、なぜ、「百円頂だい」とせがむのか。

課長　百円なら、おじさんあげるよ。
リーラン　ただは貰わないわ。
課長　じゃ、百円あげたら、何を始めるんだ。
リーラン　百円くれたら、勇気を見せたげる。
課長　女に勇気を見せてもらおうとは思わんよ。
リーラン　じゃ、もういいわ。（『二都物語・鐵假面』一九七三・十二、新潮社、十七頁）

リーランが見せてあげる「勇気」とは一体何なのか。それが明らかになるのは、痰壺に百円の銀貨が「チャリンと響く」時である。その痰壺に百円銀貨を投げてくれるのは、「内地の人」である内田一徹。リーランは百円恵まれた痰壺を抱え、歌いながら痰壺の中に手を突っ込み、銀貨をさぐる。そして、それを引き出した「手の甲は汚物で濡れて、指に挟んだ百円銀貨をヒラヒラさせ」ながら、次のように語る。

リーラン　あたしは恥ずかしい女です、一徹さん。こんな事をして、勇気だと言っているのです。誰かさんが恋しくても、決してめぐり会えない女。その身持ちの淋しさをまぎらす為に、こうやって自分を傷つけてる遊びをしているの。そして、勇気があるでしょ、あたし、ねえ、勇気がある？と言ってせがむよ。（中略）あたしは、この世で一番因果な厄病神。でも、これは、あたしにしか出来ないお祈り、あたしって駄目ね。（三十七頁）

リーランが百円を貰う代わりに見せてあげる「勇気」とは、「誰かさんが恋しくても、決して会えない」「淋しさ」を「まぎらわす」ための「遊び」だったと語るが、その「誰かさん」とは誰であり、リーランにしか出来ない「お祈り」とは一体なんだろうか。それは百円銀貨をメリーゴーランドのボックスに突っ込んだ瞬間、明らかになる。突っ込んだ瞬間、過去の「時間の木馬」は動きはじめ、かつての「悪夢」は甦る。リーランは内田に向けて、「兄さん、あたしよ。美しいあなたの妹よ」と、内田から戦時中「政治に巻きこまれ」て、日本の憲兵に殺された兄の面影をみる。その兄とは誰であるのか。別に戦時中に「政治に巻きこまれ」て、殺された誰でもよかったのか。そうではない。ここに、唐十郎が「特権的肉体」としての李礼仙のために書いた意図がある。「二都物語」の中で、リーランという名前はたった一度だけ漢字・「李欄」で書かれる時がある。それは、内田の面影からみていた兄の名前が語られる瞬間である。その名とは「李容九（リヨンゲ）」である。唐十郎が李礼仙の「特権的肉体」を「現前化」させるために、そして「朝鮮」をめぐる同時代の言説に対峙するために容易した「有効性の手品」とは、「李容九」という「悪夢」であった。それでは「李容九」とは何ものであり、その名が孕む文脈とは何なのか。

Ⅳ

一九一二年五月二十三日の「東京朝日新聞」では、「廿二日京城電報」として、「元の一進会長李容九氏、廿二日午前九時須磨にて死す、葬儀は京城にて行ふ筈」と報じ、その次の二十四には、李容九の略伝を掲載している。

朝鮮人中にて最も朝鮮人らしからぬ者、之を李容九とす、氏は確かに朝鮮人中の名士と称するに価す。幼きにして群童を抜き、天道教の信者として教主を輔け、比較的名利に

して淡にして、救民の志篤く、日露の役起るや一進会を率いて朝人の覚醒を呼号し、前途を達観して大いに日本のために尽くす所あり、数十万の会員を監励して、或軍隊の輸送に、軍用鉄道の敷設に労役せしめ、しかも之れに対して些の報酬を望まざるなど、その志の存する所を知るに足るべし。日露戦役終りて露国の勢力全然一掃されるをみるや衆に先にじて合邦を主唱し、四十二年十二月意を決して上奏文を奉り、上下の漸くその心を動かせり。而して四十三年併合の事全く成るや、我は我が務め終れしとなし、一進会を解散し東京に悠遊して、叉名利を語らず。併合後の日本当局の処置方針に就いては平かならざる所ありしにも拘らず敢て人爵を望まず、敢て官職を望まず。悠々風月を友として年来の宿痾たる肺患を須磨に養いしが、遂にたたず傷むべし。

「朝鮮人中にて最も朝鮮人らしからぬ者」である李容九が、しかし「確かに朝鮮人中の名士と称するに価す」とはどういうことであろうか。さらに「合邦」を主張したが、「併合」と同時に「一進会」を解散したとは一体何を意味するのか。もう少し、辞典的なレベルで輪郭を捉えてみよう。『東洋歴史大辞典』（一九三八、六、平凡社）の中では、李容九は「日露戦争勃発とともに、時局に明のあるかれは日本を支援してゆくことが朝鮮の将来を救う所以と信じ、日本軍の幇助に努めた」と紹介している。そして「明治四十二年十二月四日」には、「一進会百万人の名をもって一般国民に日韓合邦の声明書を発し、同時に韓国皇帝、曽禰統監ならびに総理李完用にも建白」することに至る。しかし「併合なるや総督府より一進会解散にあたり十五万円を授けられたが、宋秉畯に一任してこれに手を触れず、その清廉が讃えられた」と書いている。「併合」と「合邦」の輪郭がはっきり説明されてないので、戦後の文献である『朝鮮新話』（一九五〇・十一、創元社）でもう少し補足してみる。同書によれば、李容九が「排日排外の東学党より一転して親日主義者となったのは、韓国政治の腐敗と悪政を憤り、暴使の苛歛誅求と、その冤罪に泣く民衆の立場に深く同情した結果」であったと説明している。そして李容九が主張したのは「合邦であって、併合ではなかったらしく、あたかも欧州における、オーストリアとハンガリーのごとく、またスエーデン、ノルウェーのごとき立場におき、韓国の自治政治をしくことを希望していたもの」（二八二―二八四頁）であったと紹介している。

しかし戦後の朝鮮側からの李容九の評価『朝鮮民主主義革命史』（金鶴鳴著、引用は大東国男『李容九の生涯』（一九六〇・十、時事通信社）による）を見てみると、「併合」ではない「合邦」を主張したことに関する評価は一切触れず、ただ、「帝国主義日本」の「番犬」として、「一進会という団体」を作り、「これを使って日露戦争の軍事輸送などに朝鮮人民を強制的に狩り出したり、さらにこれを使って日韓併合運動」をするなど、日本の「朝鮮侵略を合理化するためのダシ」（十二―十三頁）であったと紹介されている。

以上を合わせ読むと、李容九は「日露戦争勃発とともに」、「朝鮮の自治政治」としての「日韓合邦」という考え方で日本を支持したわけであるが、しかしながら「合邦」とはならず、「併合」のために利用されてばかりであった。しかし朝鮮側からは、「合邦」の話には一切言及せず、「帝国主義日本」に協力した「番犬」・「売国奴」・「朝鮮人中にて最も朝鮮人らしからぬ者」・「極悪人」として、「伊藤博文を暗殺した民族の英雄安重根（アンジュングン）と対比されて」（大東国男「人世無常を呑まざるは莫（な）し」・西尾陽太郎『李容九小伝―裏切られた日韓合邦運動』所収、一九七八・一、葦書房、二五〇頁）いる。すなわち、朝鮮のナショナリズムを補強するための「ダシ」に使われている。李容九は日本と朝鮮にとって、出す味は違っても、両国の口に合う、都合のいい「ダシ」だったのである。そして「ダシ」としての李容九が、そのままそっくり再演される時があった。それは一九六五年「日韓国交正常化」前後の言説の中に見られる。

一九六〇年十月、李容九の遺子・大東国男による『李容九の生涯』（時事通信社）という本が出版されている。同書の水脈は、「合邦から併合にすりかわったいきさつ」に向かって、史料を辿りながら実証していくものであるが、しかし、この本で興味深い名前が目に付く。カバーの序文を書いた佐藤栄作。佐藤栄作は「日本経済の動向とその問題点」（『民族と政治』一九六二・一）の中で、戦時中、「帝国主義」や「侵略主義」の別な呼称として言われた「八紘一宇」について、「本当の考えはそういう帝国主義的なものじゃなく、直参一家とか人類愛の思想につながる崇高な考え方」であったと書いている。さらに一九六五年の国会では「日韓併合は両国の合意によって平等の立場で行われたもの」であるとも発言している。それに対して津久井竜雄は「善隣友好の虚妄と真実」（『現代の眼』一九六六・一）の中で、右の国会での発言は「韓国内の条約反対運動を喚ぶ一因」であったし、『李容九の生涯』に「わざわざ序文をよせている」が、果して佐藤首相は「この書の内容を知っていた」かどうか、「日本の原罪的な負目などを感得することができたかどうかは疑わしい」とその「無責任」さを批判している。この後津久井竜雄は「韓国の李容九」について、彼の思想は自ら述べているように「日本の樽井藤吉の大東合邦論によって深く影響」されたもので、「日露戦後に李は強く日韓合邦を提唱し、日本はこの提案に基づいて合邦を実現すると見せて、実は合邦ならぬ併合を行い、一進会その他の政治団体に解散」させた。いわゆる「パンを求める者に石を与える」形で「韓国を裏切」ったのであり、「日本人としては深い罪責を感じなければならない」と指摘している。大東邦夫の『李容九の生涯』を援用しつつ津久井竜雄が立とうとしている基盤は、いわゆる「反帝」である。しかし同じ「反帝」という基盤に立っていながら、李容九については全く正反対の評価を下す文脈がある。在日の姜在彦「朝鮮問題における内田良平の思想と行動」（『歴史学研究』一九六五・十二）と「東学＝天道教の思想的性格」（『思想』一九六九・三）がそれである。

姜在彦は「朝鮮問題における内田良平の思想と行動」の中で、

「さいきん、日米安保体制を基盤とする日本軍国主義復活の兆候」として、判沢弘「アジア共栄圏の思想―内田良平を中心に―」（『思想の科学』一九六三・十二）、竹内好「アジア主義の展望」（竹内好編『アジア主義』所収、一九六三・八、筑摩書房）、林房雄「大東亜戦肯定論」（『中央公論』一九六五・六）を取り上げて批判している。その時、姜在彦が立つ基盤は「連帯」前に「反帝」ありきである。姜在彦は三人の歴史の分析方法について、「こういう論客たちの論旨の特徴の一つは、史実にたいする初歩的な無理解、それからくるドクマの氾濫」と批判している。しかしその批判は当たっているとも言えるし、そうでないとも言える。

李容九と内田良平をめぐる「日韓併合」に焦点を絞って右の論文を見てみると、林房雄は竹内好の「アジア主義の展望」と大東国男の『李容九の生涯』を下敷きにしているし、竹内好も大東国男の『李容九の生涯』を援用、その水脈に乗っている。その水脈に乗って、自分の「アジア主義の展望」だけでなく、李容九が影響を受けた樽井藤吉の『大東合邦論』と「合邦」のために一緒に戦った内田良平の『日韓合邦』という論文を、自らの手で編集して「現代日本思想大系」シリーズの第九巻『アジア主義』（前出）に収めている。すなわち、閉曲線を描くこれらの磁場の中心には「合邦」がある。結果的に「併合」になったものの、それは裏切られた結果であり、「合邦」のために努力した日韓の志士達がいる。その代表的な二人が李容九と内田良平ということである。さらに林房雄と竹内好は「合邦」という水脈を遡って、『李容九の生涯』の著者である大東国男（本名・李硯奎）が日本名を名のっているのは、「けだし「大東国」の記念」（三十七頁、竹内好）であり、「その日本名が樽井藤吉、内田良平、李容九の理想した「大東国」からでたものであることはまちがいない」と、「最後まで合邦の文字を固守し、併合を拒否」（二〇八頁、林房雄）した顔ぶれ（水脈）を再確認し、その水脈にそって歴史を語り直している。

しかし姜在彦は右の水脈を容赦なく切ってしまう。まず内田良平を「日本軍国主義の朝鮮侵略過程において、李容九を頭目とする一進会を裏面からあやつり、そのお先棒をかつがせた張本人」だと断罪する。それから李容九については「戦前史観の肯定的再評価の風潮」のなかで、「李容九のたぐいが「連帯」の、または「独立」の「志士」として脚光をおびている」ことに激怒し、「李容九一味」は「日本軍警のバック・アップ、その飼主のふところをはなれては一日として安全ではありえない、反人民的な売国分子」だと非難している。しかしこの非難は、他の文脈を用いれば当たっていないとも言える批判である。例えば、姜在彦は内田良平を「侵略主義者」に仕立てるために、彼は「政府側の政策にのっとって一糸乱れず動いていい」たと批判しているが、姜在彦もが引用している内田良平「日韓合邦」（『アジア主義』所収、一九六三・八、筑摩書房）の次のような文章を引用してみよう。

日韓合邦は一進会および著者等がかかる苦心のもとに成立せしめたのであるが、その結果は総督政治となり、そ

の機構は主唱者等の希望を裏切りて、東亜連邦組織の基礎とならざるのみならず、一進会百万の大衆を満州に移住せしむる計画さえも画餅（がべい）に帰したのであった。（中略）会員はことごとく怨みを飲んで四散した。この時李容九は病を得て京城病院に入院し、四十五年の春、転地療養のため須磨に来たのであった。（中略）四月二日に及んで須磨に赴き病床を訪うた。李容九大いに喜び著者の手を握りていわく「われわれは馬鹿でしたなあ」と。けだし馬鹿を見たの意味であった。（中略）著者はここに日韓併合を叙するにあたり、一進会に対する我が政府当局の刻薄を記したる所以のものは訐（あば）いて直となすがためにあらず。政府者みずから西洋思想の弊害たる功利主義に堕し、明治以来朝鮮に支那も、常にかくのごとき行動を行ない、聖徳を傷つけ、日本精神と絶対に相反するものあるを慨し、後世をして再びこれを繰り返さしめざらんことを戒しむるがためにほかならぬのである。（二三六―二三八頁）

「日韓併合」以後の文章に注目すると、内田良平と李容九は「政府側の政策にのっとって一糸乱れず動いてい」るどころか、政府にまんまと「裏切」られたことを「怨」み、「当局の刻薄」と「政府者みずから西洋思想の弊害たる功利主義に堕」していることを非難している。すなわち「日韓併合」をめぐる内田良平と李容九の問題は、何を主体とし中心として考えるかによってその模様は変わってくる。矛盾かならずしも矛盾ではないということになるだろう。ここで問題にしたいのは実体としての真実ではない。注意すべきは、「日韓併合」の時、一回股裂かれた李容九が、「日韓国交正常化」を前後して、もう一回股裂かれる羽目になるということである。

ちなみに、最近の韓流ブームの中ではどうだろうか。「米『ニューヨーク・タイムズ』紙、英『タイムズ』紙、韓国主要メディアなどで報道され、世界中が注目！「嫌韓流現象」を巻き起こし45万部のベストセラーとなった問題作」（『嫌韓流2』の帯文、二〇〇六・二、晋遊舎）である山野車輪『マンガ嫌韓流』（二〇〇五・九、晋遊舎）を取り上げてみる。本の構成は第一話から第九話までとなっていて、一話ごとに一つのテーマを設定・議論している。それでは第八話「日韓併合の真実」に注目してみよう。場面は「日韓併合の真実」をめぐる「歴史歪曲軍国主義復活陰謀糾弾韓国大学生訪日代表団」対「極東アジア調査会」のシンポジウム、観衆あり。まず日本側から手が上がる。「とにかく韓国側」は「善悪や感情論を持ち出すのではなく歴史的事実をもとにディベートするということを今一度心に留めてください」と「歴史的な事実を置き去りにしたレッテ貼り」を非難する。その時、同じ日本側のパネリストから「本来ならあえて発言することじゃないけどね」と続く。「本来なら」言わなくて分かる常識だけど、どうも韓国側は「感情が先行しがちでかつ歴史的な事実を置き去り」にするから、「あえて発言する」と語っている日本側の基盤は、「歴史的事実」である。こんどは韓国側から手が上がる。「一九一〇年日本帝国主義は韓国を武力侵

略して植民地とした」し、数々の「残虐行為」した。しかし「これら歴史的事実を日本の右翼勢力は隠そうとするばかりか歪曲して正当化しようとしている！被害者側として絶対に許せない」と日本側の「反省」を促す。それに対して日本側は「いいえ日本人は反省する必要はありません」と異議あり宣言し、「日本の安全にとって癌でしかなかった」朝鮮を「日本の保護国にした後併合」するしかなかった当時の「世界の動き」について語る。それから日韓併合後、「近代治安国家となって奴隷制度が廃止され日本が整備したインフラの恩恵」や「韓国を併合して植民地ではなく日本の一地方としたからこそ財政負担してまで朝鮮地方に近代化を施した」ことなど史料による実証を行いながら、韓国側を「むぐぅうぐぐぐ」「むぅ…うむむ…」と言わせている。それに我慢し切れなくなった韓国側は、「嘘だ嘘だ嘘だ」「誰がそんなこと頼んだ！」と絶叫する。しかしその最後の絶叫すら「むぅ…うむむ…」と言わせた次のような台詞、「韓国最大の政治組織である一進会が併合を主張したのよ」と韓国側の「感情論」を「歴史的事実」をもって論破してしまう。「一進会が併合を主張した」という「歴史的事実」の前で、韓国側はただただ「むぅ…うむむ…」と唸るだけ、という風に山野車輪は描いている。

二〇〇六年二月に『嫌韓流2』が出版されている。そして第一巻の好評のせいか、第二巻が出た同じ日付で『マンガ嫌韓流公式ガイドブック』（晋遊舎）も出版されている。そこには著者である「山野車輪ロングインタビュー」や『マンガ嫌韓流』読者の声」、「日韓友好催促企画」のための座談会などが収録されている。ここで注目したいのは「読者の声」欄である。「読者の声」は「すばらしい本をありがとうございます」（十八頁、三十九歳・男性・医師・千葉県）と「賛成」する声と、「悔しくて情けない気持ちでいっぱいです」（二十二頁、三十歳・女性・主婦・神奈川県）と「反対」する声に分かれている（中には「賛成」か「反対」か、どちらかの立場をとりながら疑問を投げかける読者の声もある）。そこで李容九が会長を務めている「一進会が併合を主張した」と描く山野車輪に異議申し立てをする次のような「読者の声」に注目してみよう。

> 山野車輪氏は韓国人は日本と併合を望んだと事実を歪曲しました。（中略）一進会の主張は対等合併で併合ではなかったです。（二十四頁、三十八歳・男性・？・奈良県）

> また、一進会だけに限って言及しても「韓国人が併合を望んだのよ」などと言えるものではありません。一進会の主張は「併合」ではなく、「合邦」でした。（中略）朝鮮人を家畜扱いし過酷な搾取をもたらした日韓併合を望んだわけではありません。（中略）リーダーの李容九は併合の二年後に没しましたが、晩年に「日本にだまされた」と述べたそうです。（二十八頁、四十一歳・男性・設備管理・埼玉県）

山野車輪は同書の「ロングインタビュー」の中で、編集部か

らの「日韓問題に対して、一つ一つ実によく調べてありますが、調査や取材はどうしていたんですか？」という質問に、図書館から「借りた本なので、必要な部分だけを読みこむといった感じでネタを作っていました」と答えている。しかし右の「読者の声」に注目すると、山野車輪は「自費で買ったわけでな」いから「必要部分だけ」を読んだだけではなく、まさに『マンガ嫌韓流』の「嫌」を正当化するために、「嫌」を主体とし中心として「必要な部分だけ」を読んだだけなのである。だからといって右の「読者の声」が正しいということではない。右の「読者の声」は、そうとも解釈出来る一つのヨミにしかならない。ここで注意すべきは反復される李容九や一進会であり、それらが持っている構図である。日韓両国から都合のいい「ダシ」として利用されつづける構図、そしてその構図故に隠蔽されがちな次のような声を生産しつづけていることである。「私は在日韓国人ですが、韓国も日本も大好きです。（中略）私は正直複雑な気持ちでこの本を読みましたが、自分の国を悪く書かれたからと毛嫌いしたり、またはけぐちの道具だけで終わっては欲しくないです」（三十五頁、二十七歳・女性・？・？）という声である。『嫌韓流』を読むこと、それは違った衣装を纏って反復される構図に気づくと同時に、その構図故に股裂かれた主体・声が生産し続けられていることである。ついでにもう一つ注目してみよう。「読者の声」の始めの頁には、「晋遊舎編集部」による次のような文章がある。

『カンガ嫌韓流』読者はこう読んだ！　賛否両論・誹謗中傷が混然一体となった意見公開の場がここに実現。ひとつの意見に執着し、真逆の主張に耳を傾けることができなければ、かの国の人達と同じレベル。キミはこれらの意見をどう解釈するだろうか？（十五頁）

「どう解釈する」と読者に問いかける「晋遊舎編集部」の基盤は、反対側に「かの国の人達」を想定している。すなわち「真逆の主張」とは「嫌韓流」の「主張」であり、それに悟る「耳」を持たないと、「かの国の人達」のように「むぅ…うむむ…」と唸る羽目になるよ、ということである。しかし何を主体とし中心として考えるかによってその評価が流動的である李容九や一進会に注目すれば、「晋遊舎編集部」こそ「ひとつの意見に執着」していることになりやしないか。まさに語るに落ちているのである。

「二都物語」に戻ろう。リーランが追い求めた兄・李容九は、出す味は違っても、日韓両国の口に合う、都合のいい「ダシ」のような、股裂きの主体を生きる人物である。唐十郎が李礼仙のために用意した「情念」（悪夢）とは、股裂きの主体を生きざるを得ない李容九の「情念」だったのである。そして、リーランが兄の面影をみている内田一徹は、李容九という文脈を用いることによって内田良平とも読める。『李容九小伝―裏切られた日韓合邦運動』のなかで西尾陽太郎は、「日韓合邦運動全般の見通し」について、それに関係した人々を次のように色分け

している。

まず、民間合邦側としては、前述の通り韓国側の李容九と宋秉畯が一組であり、日本側の内田良平と武田範之（のりゆき）が一組である。これに対して「併合」をめざす日本政府側としては、伊藤博文と曽禰荒助が一組、山県有朋と桂太郎が一組、そして内田たちの「合邦派」と山県たち「併合派」との中間の、両者のパイプとなったものに明治政界の黒幕的存在である杉山茂丸と韓国憲兵隊長明石元二朗があったと見てよいであろう。（七十頁）

西尾陽太郎によれば、内田良平は一九〇五年に杉山茂丸の推薦により伊藤博文を知り、伊藤博文の意を託され「韓国事情調査」のため韓国に行く。そして一九〇六年十月に李容九に初めて会い、「併合」のために李容九を説得する。しかし李容九の「合邦」論に納得、ついに「合邦」派になる人物である。このような経緯を「二都物語」に引きつけて考えるならば、最初の内田はリーランに対して「わたしは、あんたなんか知らない」と言いながらも、どんどんリーランに引きずり込まれ、つい「私は、今夜からおまえのヒモだ」と言ってしまう場面がリアリティを持って浮かび上がる。「二都物語」はまさに李容九と内田良平をめぐる「日韓併合」のパロディとして読めるのである。それでは以上の李容九の文脈を導入しつつ、第二幕を見てみよう。

V

股裂きの主体を生きる李容九を第二幕の冒頭に当てると、不思議な読みが生まれてくる。場面は「会員制バー」。

刑事のマスター　（シェーカーを振っている役人のバーテンに）きみ、シェーカーというものは、８の字を描いて振るものだ。きみのは3を描いているじゃないか。

バーテン　ええ、円（マル）を二つくっつけたくないんです。

マスター　円を二つくっつけると何か都合のわるいことでもあるのかね？

バーテン　何か不真面目のようで。

マスター　８がどうして不真面目なんだね。

バーテン　わたしは何かと何かが簡単に連結されると嫌なんです。

マスター　３だって半円が二つつながっているじゃなかい。

バーテン　しかし、囲っていません。

マスター　いいかげんにしたまえ、きみ。それでは氷がうまくまざり合わないんだ。

バーテン　どうして８の字を描くんですか。

マスター　描いて誰かが傷つくもんじゃあるまいし。

バーテン　そのうち描きますから、今のところは、３にしといて。（六十三頁）

「8」と「3」をめぐる二人の会話は、「合邦から併合にすりかわった」ドラマを連想させる。「3」では「うまくまざりあわない」（併合論）と責めるマスターに、バーテンは「8」のように「何かと何かが簡単に連結」して「囲って」しまうのは「何か不真面目」（合邦論）だと反論する。しかし最後のバーテンの台詞は、「そのうち描きますから」である。すなわち「合邦」に見せかけて、最後は「併合」してしまう「日韓併合」のパロディではないだろうか。さらに一九六五年「日韓国交正常化」を前後して起こる「戦前史観の肯定的再評価の風潮」に対して、姜在彦が「八紘一宇」の復活だと批判した、あの「八」をも思い出させる場面である。さらにこの場面が「日韓併合」のパロディとして示唆的なのは、この「会員制バー」が「万年筆工場」へと変身することである。「バーテン」の台詞によると「もともと、ここは万年筆工場」だったのである。ということである。「万年筆売り」の後ろには「万年筆工場」があったということである。第二幕で「万年筆売り」は「憲兵」に変身する。するとその後ろには「憲兵」を操っている何かがあるということになる。「憲兵」に注目すると、その何かとは、西尾陽太郎の「内田たちの「合邦派」と山県たち「併合派」との中間の、両者のパイプとなったものに明治政界の黒幕的存在である杉山茂丸と韓国憲兵隊長明石元二朗があった」という解釈を連想させる。すなわち、「マスター」と「バーテン」とは「黒幕的存在である杉山茂丸と韓国憲兵隊長明石元二朗」を暗示しているのではないだろうか。特に「憲兵隊長」である明石元二郎について、当時の東洋拓殖会社の副総裁であった野田卯太郎は「朝鮮の禿山（ハゲ）を今日のように青くしたのも明石、兎も角も道路らしいものを造ったのも明石、是（ぜ）と信ずれば眼中官なく民なく一目散に突進する男」（西川虎次郎『明石将軍』一九三四・十、大道学館出版部、六十頁）と語っている。「警務総長を兼ねたる明石憲兵隊司令官」に何故このような評価が生まれるのかと言えば、明石元二郎は「憲兵と警察とを統一したる新警察制度」を作ることによって、これら二つを「同一首脳の下に統一」させたのである。そしてその任務は「1諜報ノ鬼集。2暴徒ノ討伐。3将校下士（警視、警部）ノ検事事務代理。4犯罪ノ即決」などであるが、しかしそれだけではなく「日本語の普及、道路の改修、国庫金及び公金の警護、植林農事の改良、副業の奨励、法令の普及、納税義務の諭示等の諸般の行政事務は、総べて憲兵又は一般警察官の援助を待ってせるもの」（小森徳治『明石元二郎（上巻）』一九六八・六、原書房、四四九頁）であったのである。すなわち、「新警察制度」を作って「併合という間際になって、水も漏さぬ警備を整へ、此曠古の大事業を、平穏無事の間に遂成せしめた」（四三七頁）だけでなく、実質的に「一般行政」の主体となったわけである。その「首脳」が明石元二郎だったのであり、その明石元二郎こそ「日韓併合」の「黒幕的存在」だったのである。以上のような物語を導入することによって、第二幕の冒頭は、一九一〇年「日韓併合」直前の一場面として読めるのではなかろうか。そして第二幕。内田が「私は、今夜か

らおまえのヒモだ」と言った瞬間、リーランの「時間の木馬」はまたも動き出す。

リーラン　これは、私の兄なんです。
バーテン　分かってますよ。
リーラン　どっかに連れてゆくつもりね？
バーテン　いいや、只……。
リーラン　兄さん、今のうちよ。謝ってしまいなさいよ。兄さんは只、あの人たちに通訳しただけなんだって……ねえ、兄さんっ。
バーテン　もしもし。
リーラン　兄さん、どっからか電話よ。だめよ。もう奴らと連絡なんかしたら。
内田　ジャスミン。私は何もしてないよ。
リーラン　あんたはいつもそういう。あたしにはそう言って、奴らと裏でコソコソやってるんだから。兄さん、時代はもう傾きかけているのよ。いつまでもそんなことしていたら、一人きりになってしまうのよ。兄さん、いい加減に足を洗って、村に帰ってらして。
（中略）
リーラン　兄さん、聞いた？　身柄はあたしに任せるってさ。
内田　（困って）ジャスミン。
リーラン　あんたの手、こんなにふるえてる。もう政治に巻きこまれるのはやめましょうね。（七十七頁）

『朝鮮を知る事典』（一九八六・三、平凡社）には李容九が会長を務めた「一進会」について、「日露戦争中の１９０４年８月、日本軍通訳をつとめた宋秉畯が組織した朝鮮の親日御用団体」であり、その役割は「朝鮮内の反日的な動向を探るスパイ活動や日韓併合に向けての親日世論作り」（四五一頁）だったと紹介されている。さらに姜在彦も「一進会は、日露戦争のさなかであった１９０４年１０月、表面、兵站監大谷少将の通訳として、じつは「機密にかんする任務」をおびて日本からかえった宋秉畯によって組織」（前出「朝鮮問題における内田良平の思想と行動」、十八頁）された「売国団体」だと非難している。

李容九の「通訳」や「スパイ活動」を右の本文に当てると、驚きを以って映る。リーランは、兄（李容九）は「あの人たちに通訳しただけ」だから、今のうち、「謝ってしまいなさいよ」と語る。そして「時代はもう傾きかけている」のに、「奴らと裏でコソコソやってる」と、「政治に巻き込まれる」と忠告する。だから「いい加減に足を洗って、村に帰ってらして」と説得する。リーランの言う「政治」とは何を意味するのか。それが分かるのはリーランの台詞が終わった瞬間である。二人の前には、「憲兵の服」を着ている四人の影が現れる。その「憲兵」とは、「昼間は職安、夜は万年筆屋の二股をかけ」ている、「戸籍を探し歩く元日本人」達である。過去への「時間の木馬」は、リーランの兄だけでなく、朝鮮で「憲兵」だった「元日本人」

の親をも甦らせたのである。そしてその「憲兵」は、いわゆる「警務総長を兼ねたる明石憲兵隊司令官」傘下の「憲兵」に他ならない。彼は李容九に次のようにせがむ。「そっちの彼氏は万年筆買ってくれないのかね？」「それと、あんた、もしかしたら、あたしの顔に見覚えありませんか」「あたしを知りませんか？」と。そしてリーランの次のような台詞が続く。

リーラン　兄さん、口をきいてはだめよ。
隊長　なんだって、リーラン。
リーラン　兄さんは、もうあんたたちの暗号を解読なんかしないんだ。
隊長　（仲間に）冷たい娘だね。冷たい兄妹だね。
連中　ここまできたのに。
隊長　ねえ、そこの彼氏。あたしたちを知りませんか？
リーラン　兄さん、知らないって言うのよっ。（七十八頁）

隊長の「頼む、誰か俺たちの万年筆を買ってくれ！」という言葉に、李容九はつい、「ええ」と受諾してしまう。しかしその瞬間、「軍刀がひらめく」。そして隊長は「あれじゃない。俺の戸籍には、あんな血は通ってない！」と切り捨ててしまうのである。その後憲兵達は、内田の「戸籍抄本」を手にし、内田の家族に乗り移ってしまう。リーランは酔客に「最後の百円」をせがむ。そしてニセの兄に抱きつき、「痰壺の中から一ふりの短剣をつかみだして」、「偽の一徹」の腹を刺す。その瞬間、「万年筆」も「戸籍抄本」も「燃え」てしまい、「偽の親子、衣裳をぬいでもとの万年筆屋になる」。そして次の歌が流れる。

少女たち　燃える　燃える　アメ色のベークライト
インクの夢にたたられて
炎のサインをかきまくる
燃える　燃える　裏切りの約束
暗い夢をまどろんで
灰の数ほど捨てられた（一〇四頁）

「アメ色のベークライト」（万年筆）は「合邦」を「併合」へと摩り替えた道具であり、「戸籍抄本」とは国の「戸籍」（日韓併合）の例えではないだろう。さらに股裂きの主体・李容九を導入することによって、「合邦」という「暗い夢をまどろんで」、その実現のために「炎のサインをかきまく」ってきたが、それらはすべて「裏切りの約束」で、「かきまく」った「炎のサイン」の「数ほど捨てられた」とも解釈出来る。しかしリーランが「偽の親子」を刺した瞬間、忽ち「裏切りの約束」も「戸籍抄本」も「燃える　燃える」のである。そして「万年筆」も「戸籍抄本」も燃えてしまった後、リーランは本当の内田を抱き、自死してしまう。

唐十郎は李礼仙のために李容九という「悪夢」を用意した。その時、李容九を用意した現在性とは何だったのか。李容九のどういうところを現前化しようとしたのか。「連帯」や「独立」

の「志士」としての李容九であるか、それとも「売国分子」としての李容九であるか。そのどちらでもない。唐十郎が李礼仙というフィルタを通して李容九に光を当てた時、そこに現れた陰画は股裂かれた主体だったのである。唐十郎は李容九をめぐって「日韓併合」や「日韓国交正常化」前後して起こる議論の時も、どちらかに偏るのではなく、両方の矛盾かならずしも矛盾でない主張によって、股裂かれる主体をみたのではなかろうか。ここで注意すべきは、このような李容九の主体は李礼仙というフィルタを通過することによって、初めて見えてくる光景である。李容九は李礼仙のどの部分に光を当てるかによって、その光景は変幻自在に変わってくるのである。すなわち股裂きの主体を生きる李礼仙が、股裂かれた李容九という主体を甦らせたのである。

一般市民社会では恥部に属されるものが、ある特権的な場所ではその恥部さ故に非常に輝く時がある。例えば、ヤクザの世界における刺青のように。六十年代後半、唐十郎が「言葉」に対峙する形で打ち立てた「特権的肉体論」は、演劇界において忘却されつつある「肉体」の奪還であった。そしてそのような場所では、股裂きの主体を生きる李礼仙という肉体は、非常に「特権的」に映ったに違いない。

本稿のタイトルは「特権的肉体論Ⅰ」となっている。第二弾も準備している。しかし何故「特権的肉体論」なのか。アイドルやスター論と言ったら駄目なのか。もちろんそれでも構わない。しかし、あえて唐十郎の言葉を借りて「特権的肉体論」と名づけた理由は、唐十郎が氾濫する「言葉」に苛立ったことと無縁ではない。すなわち、「在日」という文字が持つ強烈な呪縛力によって、一人一人、その人ならではの情念（それが孕む問題性）が揉み消されてしまったことへの異議申し立てである。ある特権的な場所にいる、ある特権的な在日の肉体を復活させることに、「特権的肉体論」というタイトルの意図がある。

最後に、「一番気に入った役は？」という編集部からの質問に、李礼仙は「『二都物語』のジャスミン」と答えている（「李礼仙インタビュー」『別冊新評』一九七四・十）。

【付記】

本論は「第四回九州大学日本語文学会」（二〇〇五・十・一、於・九州大学）での研究発表をもとに新たにまとめた論であります。学会会場内外で貴重なご意見を賜りました皆様に深く感謝申し上げます。

（九州大学大学院博士後期課程二年）